



仙台大学 広報室

Monthly Report

文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」で3タイプが選定



一昨年より、教育改革等に積極的な私立大学に対する助成拡充の一環として開始された文部科学省の「私立大学等改革総合支援事業」において、本年度助成に関し、仙台大学は、4タイプ中の3タイプ。具体的には、タイプ1「教育の質的転換」、タイプ2「地域発展」、タイプ3「産業界・他大学等との連携」について採択されました。

この事業は、大学教育の質的転換、地域貢献、産学連携、およびグローバル化という、現在、大学が時代から要請されている重要事項について全学的・組織的に取り組んでいる私立大学等に対する支援を強化するため、大学教育の質向上その他各事業の主要項目について取組内容を点数化し、申請大学に各項目の取り組み状況を自己評価させ、その獲得点数が一定基準を上回る場合に選定対象として認定し、選定対象となったタイプについて、経常費・設備費・施設費を一体として50%を大幅に超える補助率を適用し、重点的に支援するものです。従って、認定の有無は大学改革への取り組みに対する評価指標ともなるものです。

全国の私立大学のうち、4タイプ全てが採択となったのは5大学のみで、仙台大学は、過去2年間は全タイプで採択となってきましたが、今年度は、タイプ4の「グローバル化」は残念ながら不採択となり、英語教育の抜本的改革等が急務となっております。

本年度は、支援内容のうち「教育研究活性化設備整備費補助金」についてはタイプ1「教育の質的転換」＝平成28年1月31日づけ完成予定であるラーニング・コモンズ関係(含む同時通訳)、タイプ2「地域発展」＝血糖値測定装置・インボディ、タイプ3「産業界・他大学等との連携」＝足こぎ車いす関係設備として携帯型呼気ガス分析計、ウェアラブル光トポグラフィなどの各設備について整備することとしております。今後はそれぞれ特色ある設備の有効活用により3つの事業タイプを確実に実施し、成果をあげるとともに、大学教育の質の向上、地域社会への貢献その他、時代が要請するところに十分応えることにより、さらに世界へ羽ばたく学術的な大学として歩んで参ります。

< 目 次 >

文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」で3タイプが選定	1
ベトナムでの日本留学フェア	2
元気アップ&専門教養演習「オリンピックを学ぶ」第一回集中講義	6
学生記者がプロの現場で奮戦ーbjリーグでスポーツ取材・報道実習	6
20年間の感謝をこめて「新体操演技発表会」を開催	8
学生の競技結果	9

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら
広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関
にも旬な話題を提供していきたいと考えて
おります。

本誌へのご意見・ご質問等がございま
したら、広報室までご一報ください。

広報室

TEL 0224-55-1802

FAX 0224-57-2769

Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り

"A campus for Sports Education through English"
—LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!—2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017SENDAI Since 1967
UNIVERSITY

SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に～

ベトナムでの日本留学フェア



ハノイの日本留学フェア

2015年10月30日（金）～11月3日（火）4日間に渡りベトナムの大学との交流と日本留学フェアへ参加して参りました。

10月31日（土）1日目はハノイ市へ行き、ハノイ大学の見学を行いました。他国の大学を見学する貴重な体験をすることができました。ハノイ大学の日本語学科の学生さんと話す機会があり、日本に対する関心がとても強いことがわかりました。将来的には日本で仕事をしたいと考えている方が多いと感じました。



11月1日（日）、2日（月）の2日目間は独立行政法人日本学生支援機構主催日本留学フェアに参加しました。会場は、1日（日）はハノイ市のメリアハノイホテル、2日（月）はホーチミン市のホテルエクアトリアルで行われました。今回の留学フェアでも80を超える大学または企業が参加しました。



留学フェアにお越しくださった学生並びに教員や留学関係の企業関係者が訪れ盛大な留学フェアになりました。仙台大学のブースには2日間を通して59名の方が起こしくださいました。

仙台大学は、ハノイ大学大学院に在学している鈴木美生さんの協力を得ながら大学紹介を行いました。フェア中は先生方のご指導の下、大学の基本理念である【Sports for All】や各学科の特色を伝え、仙台大学で学ぶことができる分野について説明を行いました。留学フェアに参加してくださった学生の多くは、日本語を勉強するために日本への留学を考えていました。仙台大学では日本語を勉強できる学科はないため、スポーツ化学の分野にどのように興味を引き付けさせるかを考えさせられました。

朴澤理事長・学事顧問から「日本語を身に付けることは大事だが、それを使って何を学ぶかのほうが大切である。」とアドバイスをいただきました。

留学フェアに参加した学生は、日本語を習得した後のことを深く考えている方は少なかったと感じました。スポーツ化学の分野に関心がなかった学生も日本語を駆使して活躍できる場の1つにスポーツの分野もあることを知ってもらえたと感じました。

11月3日（火）は、ホテルエクアトリアル内会議室にてプレゼンテーションを実施した。村上新助手は「運動栄養学とは」、齋藤新助手は「健康づくり運動サポーター養成事業について」、関矢教授「足こぎ車椅子の効果と実践について」の順で行い、ホーチミン市体育大学教員と学生が参加しました。今回の運動栄養学科のプレゼンテーション内容では、ベトナムに栄養士という資格がないため、栄養に対する関心がやや低いと感じました。動画は多くの興味を引き付けるのに効果的なので、画像だけでなく動画を多く活用する工夫も必要であると感じました。今回の貴重な経験を今後の活動に生かしたいと考えています。

<報告：新助手 村上 昂>

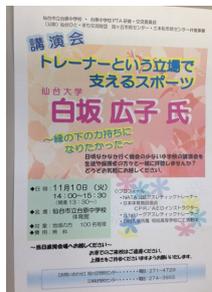


ホーチミン体育大学生に対してのプレゼンテーション

新助手の白坂広子トレーナーが講演in仙台市立台原中学校



平成27年11月10日、仙台市立台原中学校にて「トレーナーという立場で支えるスポーツ ～縁の下の力持ちになりたかった～」という題目で講演をさせていただきました。この講演会は台原中学校、台原中PTA研修、交流委員会、旭ヶ丘市民センター、三本松市民センターとの事業企画会により企画された講演会で、全校生徒がテーマを共有し、学び、気づき、考える機会を提供し、今回はスポーツ選手を身体面から支えるスポーツトレーナーの仕事を取り上げ、仕事に向き合う姿勢や思いを聞くことにより目標に向けて努力することの意義や職業観を育むための一助であるということでした。



そしてスポーツを通してトレーナーという立場から「支える側の魅力や重要性を伝えて欲しい」、という内容でした。私は地域、学校としてトレーナーという職業をモデルに支える側の重要性を知りたいと考えてくださったことに驚きを感じながらも、数あるサポート的職業のなかでトレーナーという存在にスポットを当ててくれたことをとても嬉しく感じました。そして、表舞台に立つことだけが輝かしいことではなく、表舞台に立つ人の陰にはいろいろな形で支えている人が存在し、その存在があるからこそ輝ける人がいること、そして支えている存在は表舞台を目指して支えている訳ではなく、支えることが喜びである、ということを生徒に伝えたいと思い、ご依頼をお引き受けしました。

当日は台原中学校全校生徒、教職員の皆様、旭ヶ丘市民センターと三本松市民センターの皆様、地域からご参加下さった一般の方々、約700名を対象に1時間程度の講演となりました。生徒は比較的積極的に講演会を聞き、途中で私のほうから質問をした際などしっかりと意見を出してくれたり、ユーモアで返答してくれたり、明るい雰囲気で行うことができました。トレーナーを目指すまでどのように人生を考えていたのか、目指す職業に出会ってからどのように考え方が変わったのかなど、留学経験談を交えながら話をしました。

そしてトレーナーという職業の大前提はスポーツ現場に医療的サポートを配置し「スポーツ人口の命を守る」ということ、そして、勝つために努力をするアスリートのために健康、体、傷害に関してサポート役に徹することのやりがい、楽しさ、大変さなどを、プロリーグや大学、高校での活動経験のもとお話をさせていただきました。質疑応答では、生徒からトレーナーの活動時間について、給料について、やっていてよかったと思う瞬間、などの質問があがり、職業として興味を少しでも持ってもらったのではないかと感じています。また、一般の参加者の方からはトレーナーという立場の日本の法整備について、これからのトレーナーという職業のあり方、などの質問があがりました。講演後、運動部活動所属生徒の約80名が集まり、試合と試合の間で行えるダイナミックストレッチ実技講座を即席で行いました。また、基礎的な筋力トレーニングの方法、各部活動ごとで悩んでいる怪我などについての質問があがり、約1時間改めて生徒に指導しました。



私はこの講演会を通して、改めてトレーナーという職業の意味を考えました。そしてその職業の重要性を再認識し、発展に繋げることの任務を感じました。また、講演会を通して人との出会いの尊さを感じることができました。人は人と仕事を通して繋がり、その繋がりが違う出会いの始まりとなり、そしてまた誰かと繋がっていきます。トレーナーは人間関係が良好で、関わる指導者たちと信頼関係が生まれるからこそ成り立つ職業です。つまり、トレーナーは人間関係の繋がりを大切にできるからこそ発展していく職業なのです。一つ一つの出会いを大切に、これからもサポート役、トレーナー、人間としてこの職業を通じ精進していきたいと思っています。

<講演報告：新助手 白坂広子>



柴田町16区行政区地域交流イベント「秋の大運動会」を開催



11月8日（日）に槻木体育館で「秋の大運動会」が開催されました。このイベントは毎年、柴田町16区行政区と合同で開催しているもので、今年で6年目となります。本学独自の認定資格である健康づくり運動サポーターの上級実習の一環として、上級実習生2名がイベントの企画・運営を行いました。今年は「運動する楽しさを知っていただくこと」、「住民同士のコミュニケーションだけでなく、学生とも交流を深め仙台大学の活動について知ってもらう」ことを目的として、10月上旬から16区代表者、柴田町福祉課、上級実習生の3者で話し合いを重ね当日を迎えました。

当日は上級実習生の他に、健康づくり運動サポーター（健サポ）15名と小池教授、新助手3名がスタッフとして運営に携わりました。体組成や骨密度を測定できる測定コーナーや健康づくりのための講話や運動を

行う健康指導コーナー、楽しみながら身体を動かすニュースポーツコーナーを実施し、健康づくりについての理解を深めてもらいました。

後半には、参加者全員で楽しむ運動試し競争や玉入れ等運動会を実施し、一生懸命に体を動かしながらも楽しんでいるのが印象的でした。イベントには78名の方に集まっていただき、大盛況のうちに終わることができました。

上級実習としてイベントを企画した佐藤達也さん（体育学科4年）は「参加者と学生が触れ合える内容を意識しました。当日は参加者も学生も楽しんでくれて良かったです」と、穴戸香菜子さん（健康福祉学科3年）は「将来は養護教諭を目指しています。人を動かす大変さを学生のうちに経験できたことは財産です」とそれぞれ感想を述べました。

普段、学生たちは授業など大学の中でも知識や技術を得ていますが、学外で地域の方々と触れ合う中で学内での学びが生きた学びとなり、現場で活躍できる力を身につけることができていると感じています。健サポの学生たちが社会に出た時に即戦力として活躍できるよう、今後もしっかりとサポートしていきたいです。

<報 告：新助手 齋藤まり>

給食運営実習Ⅰでの昼食提供について



1. 実習の概要

運動栄養学科3年後期に開講されている給食運営実習Ⅰは、栄養士免許取得のための必修科目であり、大量調理（60食程度）を行う実習を実施しています。3年前期までに学んだ献立作成、発注業務、調理作業、衛生管理などの知識や技術を使って学生が主体となり食事の提供を行う実習です。栄養士班3～4名の学生が調理班である10名程度の学生に指示を出して調理作業を実施しています。

2. 実習の特徴

本実習を行う集団給食実習室には、大量調理専用の調理機器があり、100人分程度を一度に調理することが出来る回転釜や大量の食材を短時間で切ることが

出来るフードカッターなどの使い方を学びながら作業をしています。また、煮崩れを防ぐ調理方法や味付けの仕方など大量調理ならではの注意点がります。更に、調理作業中の細菌の混入や食中毒を予防するために、ボウルやザルなどの調理器具は肉、魚、野菜など食材ごとに専用のものを使っています。

3. 昼食の食券販売について

本実習では、教職員の方々に食券を購入してもらうことで、より実践に近い形で緊張感を体験と給食に対する客観的な評価を得られることを期待し食券を販売しています。これまで延べ54人の方々に食券をご購入いただきました。お時間のある方は、ぜひ学生が調理した食事を食べに来てください。

【提供時間】 11：00～11：30

(11/6～12/18までの毎週木・金曜日)

【食券価格】 400円

【提供場所】 25記念館1階 集団給食実習室食堂

【担当者】 岩田 純、渡部 由佳、三品 朋子

※ご希望の方は担当者まで内線もしくはメールにてお知らせください。

菊地眞一氏を偲ぶ会



今年8月に急逝された川交会(前)会長の故菊地眞一氏を偲ぶ会が、11月10日午後5時30分より本学の学生食堂において行われ、故人と親交のあった関係者約50人が出席されました。

故人は平成元年に川交会を発足させた方で、柴田町の福祉劇団「鶴亀」等の立役者でもありました。川交会は、白石川と阿武隈川が交わる場所という意味で命名され、地元柴田町にある本学のスポーツサークルを協力して支え応援していこうという有志の会です。その応援や支援は硬式野球部に始まり、その後ボブスレー・リュージュ・スケルトン部、新体操競技部、漕艇部に広がりました。

偲ぶ会では始めに故人への黙祷が行われ、続いて学校法人朴沢学園朴澤泰治理事長より主催者挨拶がありました。

思い出のスピーチでは、柴田町ボート協会会長の児玉裕雄氏の「菊地眞一さんの遺志をこれからも引

き継ぎ、漕艇部の活躍を祈念し、できる限り応援していきたい」、とのお言葉に続き、川交会(現)会長の大沼英一氏からは「仙台大学が存在する限り次代を担う若人を支援していきたい」、宮城県ボブスレー・リュージュ連盟会長の大沼迪義氏からは「そり競技を全国に広めたいと語っていた眞ちゃんとの交わりはかけがえのないものだと思います」とのお話がありました。また、高橋義夫硬式野球部長、森本吉謙硬式野球部監督、阿部肇漕艇部監督、斎藤幸一元柴田町議会議員、安部俊三柴田町議会議員のスピーチもあり、親交の深さがうかがえました。

喪主謝辞では、子息である本学の菊地太一庶務課長の氏より、ご参集の方々への感謝と故人との思い出話が述べられました。

おわりに、鈴木省三副学長より、「31年前にサラエボで行われた冬季オリンピックへの出発前に行われた壮行会で菊地眞一さんから熱い抱擁を受け、仙台大学の世界一の応援団と感じた」と、その当時のエピソードが披露されました。また、2020年に東京で開催される夏季オリンピックでは「念ずれば道ひらく」との意気込みで、是非仙台大学からメダリストを出したいと力強い閉会の挨拶がありました。

会は故人が気さくで親しみやすいお人柄だったこともあり、終始和やかな雰囲気の中で行われました。改めてご冥福をお祈り申し上げます。

＜報告：庶務課担当課長 石渡修一＞

秋のプラスチックそり大会を初開催—滑って輝く子どもたちの笑顔



プラそり競争を盛り上げる仙台大生と子どもたち=太陽の村

11月7日(土)、柴田町の太陽の村で、傾斜25度の芝生の上をプラスチック製のソリに乗って30m先のゴールまでのタイムを競う「秋のプラそり大会」が初開催され、小学1年生から小学6年生までの児童33名が参加しました。プラそり大会は、冬季オリンピックの正式種目になっている「ボブスレー・リュージュ

・スケルトン」などのソリ競技の魅力を知ってもらうことを目的として、宮城県ボブスレー・リュージュ連盟が主催し、仙台大学ボブスレー・リュージュ・スケルトン部が協力して行なわれました。

子どもたちは、仙台大生から速く滑るコツや乗り方・止まり方などを教わり、歓声を上げながらソリ競争を存分に楽しみました。

小学校低学年の部で優勝した村田町立村田小学校2年の女子児童は、「大学生に、滑る時は体を動かさないようにすることがスピードを出すコツと教わりました。怖くなかったし、楽しかったです。またやりたいです」と語ってくれました。

本学ボブスレー・リュージュ・スケルトン部の浅野拓海さん(体育学科3年-宮城・利府高校出身)は「子どもたちから、笑顔で「楽しい」・「面白い」・「もう一回やりたい」などの言葉が聞けて、本当に嬉しかったです。企画運営は大変でしたが、達成感があり、仲間と協力することの大切も実感し、多くを学ぶことができました。この経験を活かして、来年に繋げていきたいです」と話しました。

元気アップ&専門教養演習「オリンピックを学ぶ」第一回集中講義



11月23日（勤労感謝の日）スポ情専門教養演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと元気アッププログラム集中授業がJSC日本スポーツ振興センタースポーツ開発事業推進部長でJISS副センター長、ナショナルトレーニングセンター副センター長を務める勝田隆氏を講師に招き行われた。集中授業は勝田氏のキーノートレクチャーからスタートしグループで討論と発表が行われた。

この日のテーマは「2020年に向けて、2020年を越えて」と題し、スポーツ界・IOCはじめ世界のトップスポーツ指導者が口にするキーワードintegrity

（インテグリティ）がスポーツにとっていかに重要か、また東京オリンピックに寄せられる日本への期待、将来のスポーツ界の姿を話し合った。

この中で勝田氏は前IOC会長ジャックロゲが警告した「スポーツ界は危機に瀕している」を紹介しスポーツのINTEGRITYを脅かす要因が増えている中、世界が規律正しい日本（世界は津波震災時の被災者の人間としての高潔性に驚嘆）、東京がオリンピック会場に選ばれた理由の一端と説明。

またスポーツ界の考え方、組織体制を変えるには①危機的状況に落ち込んだ時、②カリスマリーダーが出現した時③自国開催のオリンピックの時であるとしてスポーツの新しい時代に向けて2020TOKYOは重要。皆がこの問題に向き合うことがオリンピックを成功させ、次の時代のスポーツのあり方を決めていく要素になるだろうと話した。この後学生たちは2020TOKYOに向け、何をしたら良いかなどを真剣に討論し充実した発表を行った。

<報告：スポーツ情報マスメディア学科
教授 山内 亨>

学生記者がプロの現場で奮戦—bjリーグでスポーツ取材・報道実習



プロの記者に交じり、バスケットボールの試合を取材する、スポーツ情報マスメディア学科の「スポーツ取材・報道実習Ⅰ」が11月28、29日、仙台市青葉区の仙台市青葉体育館で行われました。

取材対象は、プロ・バスケットボールのbjリーグ2015-2016シーズン第17、18戦、仙台89ERS対横浜ビー・コルセアーズ。首位に躍り出た仙台がその座を守れるか、直前まで3連勝中の横浜が一気に勢いに乗れるかが注目されたカードでした。

実習に参加したのは28日に4人、29日に7人の計11人でした。学生たちは両日とも仙台89ERSを運営する「仙台スポーツリンク」の女性広報担当から、広報の業務内容やゲーム写真取材のポジションなどについて説明を受けた後、2人1組となって交互にスタンドでの観戦取材と、

プロカメラマンと一緒にゴールエンドに座り込んでデジタルカメラによる写真取材をそれぞれ体験しました。試合前には仙台大学OGで仙台89ERSのチアリーダーを務める鈴木保之香さんらのパフォーマンスも写真に収めました。

試合結果は、初日が仙台、2日目が横浜のそれぞれ勝利でしたが、仙台はかろうじて首位を守りました。試合後の記者会見は両日とも仙台の「首位」に絡む内容が中心でした。学生記者たちは新聞社、テレビ局、雑誌社のプロ記者たちを取り囲むようにして、ヘッドコーチや指名選手の会見内容をメモしました。プロの記者たちの会見後は、仙台大学取材陣による単独インタビューです。リクエストしたのはもちろん両日とも仙台大学OBで89ERSの佐藤文哉選手。初日はプロ記者も一部交り、佐藤選手への質問は後輩の学生が取材に訪れたことに対する感想にまで及びましたが、2日目は完全単独インタビューとなりました。両日ともやや遠慮がちな学生に対し、快く会見リクエストに応じ、丁寧に質問に答えてくれた佐藤選手の姿が印象的でした。

<報告：スポーツ情報マスメディア学科
教授 高橋 義夫>

第11回スポーツシンポジウム ～もっとスポーツを楽しむために～ を開催



西村氏(右)による基調講演の様子(聞き手・吉井講師)
=せんだいメディアテーク

平成27年11月24日せんだいメディアテークを会場に、第11回スポーツシンポジウム(主催:仙台市、河北新報社、仙台大学、協力:スポーツコミッションせんだい)を開催しました。

今年のテーマは「もっとスポーツを楽しむために」で基調講演とパネルディスカッションの2部構成でのシンポジウムが行われ約300名の来場者が席を埋め尽くしました。

第一部の基調講演には2010・2014FIFAワールドカップレフェリーを務めた西村雄一氏を迎え、全世界から集結した90名のワールドカップレフェリーたちの様々なトレーニングの様子などが紹介されました。

後半は本学サッカー部監督の吉井秀邦講師を聞き手に試合映像を交え、あらゆる場面を想定し正しくジャッジする難しさなどが語られました。

第二部のパネルディスカッションでは、新体操団体日本代表で元フェアリージャパンPOLAの三澤樹知氏、東北楽天イーグルスチアリーダー東北ゴールデンエンジェルスで結成時から11年間活躍を続け2012年からはチームリーダーも務める本学卒業生の上田亜樹氏(健康福祉学科卒)、本学からは2014仁川パラ陸上競技大会女子砲丸投げ世界記録保持者で、パラリンピック出場を目指す加藤由希子さん(健康福祉学科4年)と宮西智久教授(体育科学博士・専門バイオメカニクス)の4名それぞれの立場からの競技の関わりと自身の経験などが話されコーディネーターを菊地直子准教授が務めました。

会場には西村さんを通じてお借りした、ワールドカップでのメダルやユニフォームなどとともに本学の紹介パネルを多数展示し、来場者に本学の魅力を説明と共に伝える試みも新たに行い、多数の来場者の興味関心を得ることができました。

仙台大学柔道塾、小学生男子団体の部「初優勝」を阿部学長へ報告



初優勝を飾った仙台大学柔道塾生ら=学長室

10月25日(日)、宮城県武道館柔道場で「宮城県スポーツ少年団柔道交流大会」が開催され、仙台大学柔道塾が小学生男子団体の部で初優勝を飾りました。

本学では、体育系大学の特色を生かした地域貢献活動の一つとして、ジュニアアスリートの育成に取り組んでいます。その中の一つである「仙台大学柔道塾」(2011年7月発足)には、現在、幼稚園年長から中学生までの約40名が在籍し、週3回の稽古で汗を流しています。

子どもたちの指導にあたっているのは、仙台大学柔道部総監督であり、柔道女子日本代表監督でもある南條充寿塾長【後列中央】と南條和恵仙台大学女子柔道部監督【後列右端】。加えて、本学柔道部の学生たちです。

11月17日(火)、同大会小学生男子団体の部で見事初優勝を果たした仙台大学柔道塾生5名とその保護者が、南條塾長と南條和恵監督と共に、阿部芳吉学長【後列左端】へ「優勝」の報告を行ない、優勝旗や賞状が披露されました。阿部学長は「凄いな。最後の最後まで頑張った良かったな。もっともっと伸びて、将来は仙台大でオリンピック選手になってほしい」と子どもたちへ労いと激励の言葉を述べられ、南條塾長は「柔道塾の目的は、地域密着型の柔道を通じて柴田町を元気にすること。初優勝は嬉しいが、次につながるよう日々の稽古に励みたい」と気を引き締めました。中堅の太田晴仁君(船岡小学校6年生)【前列中央】は「(団体決勝を含めて)4試合戦って2勝2敗でした。何一つ満足していません。個人的には悔しい大会でしたが、団体優勝は嬉しいです」と話してくれました。

20年間の感謝をこめて「新体操演技発表会」を開催



仙台大学男女新体操競技部による最終演技＝仙台大学第五体育館

11月29日（日）、仙台大学第五体育館で、本学男女新体操競技部主催の「第20回新体操演技発表会Next stage～20年間の感謝をこめて～」が開催されました。

最初に仙台大学を代表して、朴澤泰治理事長・学事顧問は「20回という節目を迎えることができたことは、非常に感慨深い気持ちである。新体操はオリンピックの正式種目。2020年の東京オリンピックに向けて活躍するアスリートを育成すると共に、本学の地域貢献の一つとしてジュニア新体操教室を開催している。子どもたちの元気な演技を楽しみにしている」と挨拶。

出演は、本学男女新体操競技部・仙台大学開放講座ジュニア新体操教室・本学ブレイキン同好会に加え、小野桜菜選手（仙台スピン体操クラブ）と泉田佳穂選手（仙台ジュニア体育研究所）にも賛助出演して頂き、発表会を盛り上げて頂きました。各選手たちは、それぞれの持ち味を十分に発揮し、素晴らしい演技で会場を埋めた300名余を魅了しました。最終演技が終わると、会場からは惜しめない拍手が送られ、第20回新体操演技発表会は盛会裏に終了しました。

発表会終了後、本学女子新体操競技部の桑原玲美主将（体育学科4年一山形・霞城学園高校出身）は「記念すべき第20回新体操演技発表会。これまでの感謝の気持ちをこめて演技しました。感謝の気持ちを忘れず、これからも部員一丸となって発表会や練習に取り組んでいきますので、応援をよろしくお願い致します」と話しました。

今年で20回目を迎えた新体操演技発表会は、さわやかな余韻を残し、幕が閉じられました。仙台大学はこれからも新体操演技発表会を続けて参りますので、温かいご支援・ご声援をよろしくお願い致します。

平成27年度 防犯まちづくり多賀城市民のつどい 阿部学長が「地域で守る子どもたち」と題し講演を行いました



写真提供：多賀城市総務部交通防災課

平成27年11月21日（土）多賀城市民会館において、多賀城市防犯まちづくり推進協議会と多賀城市が主催する「平成27年度防犯まちづくり多賀城市民のつどい」が開催され、阿部学長が「地域で守る子どもたち～子どもが犯罪に巻き込まれないために～」と題した講演を行いました。

当日は地域が一体となって安心できるまちづくりを学ぼうと多賀城市民の方々など約350名が会場に訪れ熱心に耳を傾けました。

阿部学長は、中学校等において校内暴力やいじめ、不登校など生徒指導に関わり、仙台市教育委員会教育長をも務めた経験から、地域の役割や大人の見守りなどが犯罪を防ぐためにいかに大切かなどを分かりやすい表現と聞く人を飽きさせない語り口で、いろいろなエピソードやユーモアを交え話されました。

聴講された市民の方々も良い会だったと満足げに話され、市の担当者の方も親しみやすく、かつ温かみのある講演会で防犯意識も高まり大変好評でした、誠にありがとうございましたと、話してくださいました。

また、講演終了後にはバリトン歌手とピアノ演奏によるミニコンサートも開催され和やかに会が締めくくられました。

男子サッカー部、創部以来初の3冠達成！—15年連続32回目のインカレ出場へ



優勝を果たし3冠ポーズをとる仙台大イレブら
＝岩手県営運動公園多目的運動場

11月3日（火）、岩手県営運動公園多目的運動場（岩手県盛岡市）で「第40回東北地区大学サッカーリーグ最終節」が行われ、仙台大学が岩手大学を3-0（前半1-0、後半2-0）で破り、優勝（8勝2分）を果たしました。これで本学男子サッカー部は、15年連続32回目のインカレ（第64回全日本大学サッカー選手権大会）出場の切符を手に入れました。

仙台大学は前半16分、DF石橋理志選手（体育学科3年－群馬・前橋育英高校出身）のスローインからFW堺俊暉選手（体育学科4年－神奈川・相洋高校出身）がグラウンダークロスを上げ、FW宮澤弘選手（体育学科2年－柏レイソルユース出身）がダイレクトに合わせて先制。後半14分には、ゴール前のこぼれ球に素早く反応したMF蓮沼翔太選手（体育学科4年－柏レイソルユース出身）が、相手DFを交わし技ありの2点目。さらに後半42分、攻守において躍動していたDF川上盛司選手（体育学科2年－鹿島アントラーズユース出身）が3点目のゴールを挙げ、試合を決定づけました。先制ゴールを挙げたFW宮澤選手（同）は「今日の試合は、勝つことしか考えていなかった。ゴールシーンは（良いクロスが来たので）決めるだけでした」と試合を振り返りました。



FW宮澤選手（14）が決勝点となる先制ゴールを決め喜びを表す。

本年度の本学男子サッカー部は、「総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント東北地区予選」、「天皇杯全日本サッカー選手権大会宮城県予選」も制しており、1968年の創部以来初となる3冠を達成しました。10年前、天皇杯に初出場した2005年度は、総理大臣杯予選・インカレ予選ともに優勝を逃していました。また、その後は幾度も総理大臣杯予選とインカレ予選で優勝しながらも天皇杯の出場権を獲得できず、3冠達成は目標としながらも高い壁となっていました。

悲願の3冠を達成した吉井秀邦監督は「今年のチームは、総理大臣杯・天皇杯・インカレと全ての予選を制し3冠を達成したということで、最強世代だと思っている。このチームでインカレに挑戦できる権利を得たことは、凄く楽しみであり自信を持って臨むことができる」と喜びを表しながらも、落ち着いた様子で次（インカレ）に向けての抱負を述べられました。

インカレは、12月8日（火）から町田市陸上競技場（東京都）等を会場として開催される予定です。また、上記の大会の他に、男子サッカー部のBチームが「東北地区大学総体」・A2チームが「インディペンデンスリーグ」で優勝を果たしており、東北地区で本学男子サッカー部がその実力を轟かせた一年となりました。

引き続き、本学男子サッカー部への熱いご声援をよろしくお願い致します。

<記事・写真：スポーツ情報マスメディア学科
溝上拓志新助手提供>



DF川上選手（2）が試合を決定づける3点目のゴールを挙げた。

仙台大初のプロ野球選手・熊原健人投手が横浜DeNA新入団選手発表会にて、背番号「1」が決定！



フォトセッションにてガッツポーズする熊原投手（前列中央）

11月27日（金）、横浜DeNAベイスターズ新入団選手発表会が横浜市内のホテルにて行われ、同球団からドラフト2位指名を受けた本学硬式野球部・熊原健人投手（体育学科4年-宮城・柴田高校出身）が出席しました。

新人各選手が色紙に漢字2文字で抱負をしたためる中、熊原投手は“進歩”と記し、「自分はまだまだ未熟で成長するところがたくさんあるんですけど、一日一日を無駄にせず、少しでも進歩して、なりたい自分になれるように」と、その意図を説明。

背番号は「1」に決まり、「（山下大輔、谷繁元信、金城龍彦など歴代のスター選手が付けた）重みのある番号。ルーキーの自分が付けていいのかと思うけど、それだけ期待されているのだと、与えてくださった球団に感謝したいです。将来的には『ベイスターズの背番号1といえば、熊原だ』と思われるようになりたいです」。

代表質問では、1年目の目標を聞かれ「開幕1軍。先発として勝ち星を重ねて（昨年大学ジャパンでもチームメイトだった）山崎康晃さんのように新人王を獲りたい」。また自らのセールスポイントに「内角を強気に攻める、投げっぷりの良さ」を挙げるなど、終始緊張の面持ちながらも力強くプロとしての決意を述べました。

熊原投手は、来春のキャンプでドラフト1位・今永昇太投手（駒澤大学）らとともに1軍帯同が見込まれています。球団史上初となる2年連続の新人王に、大いなる期待が持てそうです。